

【本研究を継続するにあたって】

1 研究主題

友達とかかわる力をはぐくむ保育 ～全ての幼児は『感じて』いる～

2 研究主題設定の理由

幼児は、家族や友達、保育者など身近な人との安心できる生活の中で、周囲の人と信頼関係を築き、それを基盤にして成長していく。すなわち、幼児の成長にとって人とのかかわりは不可欠なことである。しかし、近年の世の中の状況から、人と人との直接かかわる機会が減少していると言えるであろう。その影響は本園児の受け身な態度、自分の思いをぶつけないといった様子からも伺える。そのため、本園では平成24・25年度と「友達とかかわる力をはぐくむ保育」を研究主題として取り組んできた。「かかわる力」とはどのような力なのかを考察し、各年齢においてかかわる力をはぐくむために幼児に身に付けさせたい力について検討も行っている。その結果、「かかわる力」の土台として、幼児一人一人の自分自身・【主体性】が重要であると共通理解した。また、育てたい力から幼児をみていく中で、友達とかかわる幼児の姿や、かかわる力につながる教師の援助の在り方について、実践を通して追求してきた。

その中で、新たな疑問が生じた。主体的に自信をもって過ごす幼児は、全ての場面においてかかわる力を発揮しているのだろうか。相手がいるからこそ、「かかわる力」が見えてくるのではないか。自分から動かなくても（主体的に見えなくても）友達とかかわり合う幼児の存在はどう説明すればよいのだろうか。

そこで、考えられたのが、かかわる力とは『感じる』ことと深く繋がっているのではないか。そして、全ての幼児は『感じる』ことを資質としてもっているのではないかということである。幼児は周りの大人の様子を敏感に察知する。極端な例では、乳児は、母親が笑顔であれば機嫌良く、母親の不安は乳児の不安となる。その『感じる』存在である幼児の発信を他の幼児や教師がどのように受け止めているかを実際の姿や実践を通して明らかにしたい。また、かかわる力をはぐくむ中で根底にあると思われる『感じる』の存在を追求したいと考え、今年度も引き続き研究を進めることとした。

3 研究のねらい

- (1) 幼児一人一人の『感じる』に着目して、友達とかかわる力をはぐくむための教師の援助や環境の構成の在り方について追究する。
- (2) 追究の結果得られた成果を基に、本園の教育課程を改善する。

4 研究方法

- (1) かかわる力と幼児一人一人の『感じる』に着目し、目指す幼児の姿を設定する。
- (2) 友達とかかわる幼児の姿から見えてきた要素を生かし、育てたい力について検討する。
- (3) 友達とのかかわりの中でも、幼児一人一人の『感じる』に重点を置いた実践事例を基に、保育カンファレンスを行う。
- (4) 先行研究に当たったり、指導助言者から指導を受けたりする。
- (5) 各保育室の環境の構成について協議し、見直す。
- (6) 入園から終了までを「期」でとらえ直した指導計画を作成する。

【研究の内容】

1 目指す幼児の姿

本研究で目指す幼児の姿を、園の教育目標や各年齢の重点目標を踏まえつつ、『感じる』をキーワードにして友達とかかわる視点から各学年ごとに考え、3月の姿として設定した。そして、この姿の実現を目指すことを通して、教育目標の「健康でいきいきとした子ども」に向かっていこうと考えた。

また、目指す幼児の姿を検討していく中で、園の教育目標から掘り下げていくという過程ではなく、幼児の側に寄り添う幼児教育としてのあるべき姿も話し合った。向かっていくという目標であることには変わりはないが、幼児の成長に合わせた幼稚園の実態を生かして、下向きの矢印へと変更したことも付け加えておきたい。

年少児：友達と一緒にいる楽しさを感じ、
同じことをしたり、同じことに気付いたり、ぶつかり合ったりして、
影響し合いながら、
相手を感じて 遊ぶ。

年中児：自分の思いや考えを伝えたり、友達にも思いや考えがあることに気付いたりして、
自分と相手の違いを感じながら、
友達とかかわり合う楽しさを感じて 遊ぶ。

年長児：友達と一緒に課題の解決や共通の目的の実現に向かう過程で、
友達を認めたり、大切に思ったり、憧れたりしながら、
友達とかかわり合う充実感を感じて 遊ぶ。



〈研究主題より〉

自分に自信をもち、自己を発揮しながら、友達と影響し合い尊重し合って遊ぶ子ども



〈教育目標より〉

健康でいきいきした子ども

- 身近な環境に興味や関心をもち、自らかかわっていく子ども
- 豊かに感じとり、考えたり表現したりする子ども
- 友達に関心や親しみの気持ちをもち、友達と楽しく遊ぶ子ども



2 育てたい力 ～友達とかかわる幼児の姿から見えてきた要素を生かして～

1年次、2年次に引き続き、各学年ごとの目指す幼児の姿を実現するには、どのような力を育てる必要があるのかを再検討した。その中で、「育てたい力」と2年次の研究から得られた「友達とかかわる幼児の姿から見えてきた『要素』」との関連を一つ一つ確認していった。ここで言う「要素」とは、友達とかかわっている幼児のもつ力や特性のことである。（平成25年度研究紀要を参照）

その結果を、「主体性」「相互性」「道徳性」の3つのキーワードのもとに整理したものが下表である。「主体性」とは、行為の主体としての自らの活動を認識し、「この行為のこの感情のこの考えの主人公は私である」という実感をもち、この私に責任をもてるようになること。「相互性」とは、相手の思いや動きに応じて自らを調整していくこと。「道徳性」とは、他者を思いやる心、善悪の判断、社会規範を守って行動すること。なお、幼児期においては、道徳性の基盤となる感性を育てていくことが重要であるとの考え方に立っていることを付言しておきたい。

検討していく中で、それぞれの育てたい力について共通のイメージがもちにくいものについては、吹き出しを用いて幼児の具体的な姿をもとに補足し、共通理解した。

表 育てたい力

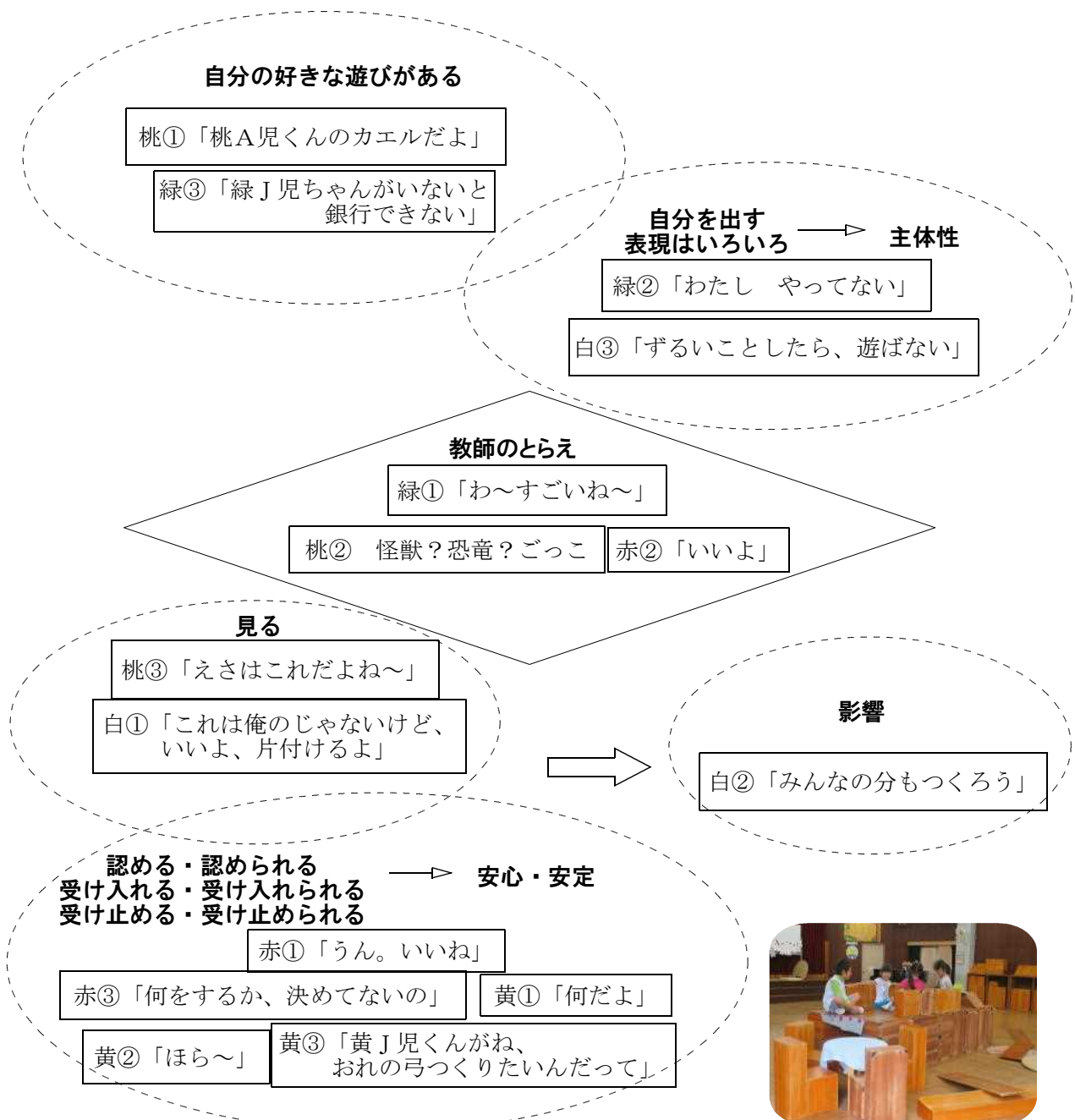
	年少児：相手を感じて	年中児：自分と相手の違いを感じながら	年長児：友達とかかわり合う充実感を感じて
主体性	<p>○好きな遊びを楽しむ力</p> <p>・遊びを思い切り楽しんでいる</p>	<p>○自己を十分に発揮して遊ぶ力</p>	<p>○友達と一緒に遊びを楽しむ力</p> <p>・自分から周囲にかかわろうとする</p> <p>・友達に積極的にかかわっている</p>
相互性	<p>○様々な人に関心をもつ力</p> <p>・友達の遊びや行動に関心をもっている</p> <p>○自分と周りの人の関係を認識する力</p> <p>・「私」以外にも自分の先生を呼ぶ子がいる</p> <p>・「お母さん」と同じように呼ぶけれど、自分のお母さんではなく、あの子のお母さん</p> <p>・自分のクラスには3人「先生」がいるが違う</p>	<p>○自分と他者との内面の違いがはっきりと分かる力</p> <p>・一緒に遊んでいても同じことを考えていなかった</p> <p>・友達の表情や声の変化に気付く</p> <p>○他者の気持ちを理解する力</p> <p>・友達のことを思い行動する</p> <p>○自己主張をしたり、相手の主張を受け入れたりする力</p> <p>○自分たちで解決しようとする力</p>	<p>○思いや考えを伝える力</p> <p>○友達の意見を聞く力</p> <p>○折り合いをつける力</p> <p>・考えを出し合い、解決策を生み出す</p> <p>○友達と一緒に解決する力</p> <p>・友達への思いをもち続ける</p> <p>・人のために意見を言う</p>
道徳性	<p>○親しみをもって、いろいろな挨拶を交わす力</p> <p>・目が合う</p> <p>・微笑む</p>	<p>○約束の必要性に気付き、守ろうとする力</p>	<p>○自分の役割を考えて行動する力</p> <p>・全体を見ながら遊びを進めることができる</p> <p>・皆が楽しめるように遊びをリードしている</p>

3 『感じる』に着目した事例検討から見えてきたこと

1年次の研究から、友達と「かかわる力」の土台としての「主体性」が重要であるということが明らかになった。2年次では、友達とかかかわっている幼児にはどのような力や特性があるのかを考察し、「かかわる力」につながるのは幼児が自分自身に「自信をもつ」ということが、大切であることを確認した。

しかし、友達とかかかわっている幼児が本当に主体的で自信をもっているのか、教師の目からは友達とかかかわっていないように見える幼児は主体的でなく自信もないのか、という疑問が生じた。そこで、それらを検証するため、全ての幼児は『感じる』存在であるというスタンスの基で幼児とかかわり、一見かかかわっているようには見えない場面でも、実は幼児は『感じている』ととらえた場面を事例として持ち寄り、カンファレンスを行った。表面的には見えていなくても、様々な姿を幼児が感じている姿として共通理解していった。それらをまとめたのが以下の図である。

図1 事例検討から見えてきたこと



幼児には**自分の好きな遊びがある**ことが重要である。周りの人とのかかわりのきっかけになったり、幼児の拠り所＝自信にもなったりするのであろう。**自分を出す**という意味では**主体性**とも深く関わるが、自分の遊びは表現の一つでもある。幼児の**表現方法は色々**である。『感じる』ことを前提でみると、独特の表現方法で自分を出しながら過ごす幼児をとらえることができる。一見すると主体的に見えない幼児でも必ず自分を出している。**教師のとらえ**方次第で、幼児理解やかかわり方も変わってくる。そのことは幼児への環境の構成や援助の在り方にも影響する。幼児同士が感じ合っていることを教師が同じように感じることができれば、より幼児のかかわる力を引き出すことができるのであろう。

幼児同士のかかわりでみていくと、幼児はお互いをよく**見ている**ということが明らかになった。それは、友達を**認める**ことであったり、**受け入れる**ことであったり、**受け止める**ことであったりする。一方で、認められる、受け入れられる、受け止められることでもあると言える。そして、それらは幼児の**安心**や**安定**につながり、幼児同士で**影響**を及ぼし成長していく。(実践事例はH26紀要参照)

4 『かかわる力』の再考

幼児が自ら友達に働き掛けること、友達からの働き掛けに応じること、友達と一緒に遊ぶこと、力を合わせて問題を解決すること、そして、それらの行為を支える心情や態度のことなどを「かかわる力」とする。決して表面的な“仲良くする”を指しているのではないことは、明確にしておかなければならない。

幼児の「かかわる力」をはぐくんでいく経過を図-2に表した。「かかわる力」=花のもとになるものは**球根**の中にあると考えた。球根は、全ての幼児の内面にもともとあるものと考えている。その中には、「感じる」「主体性」「相互性」「道徳性」の4つが存在する。特に「感じる」は、他の3つの基底に位置していると考えられる。すなわち、「感じる」が**根**を張り、「主体性」「相互性」「道徳性」それぞれの**葉**を支える。

「感じる」の根は基底にあるが、それだけで生長するわけではなく、遊び・友達・ものなどの環境が影響を与え、教師という**太陽**が見守り、かかわっていく中で、3つの葉がバランスよく生長し、「かかわる力」の花は、咲くと考える。

図2 かかわる力の花

